

六花

11



2019

りっかはいどかい

霧深き豊後水道急に霽れ
秋夕焼宇和の夕日に墓ぬくみ
昼の虫豊後水道鳴き浄む
柿熟れて墓などしまふ話かな
高原に妄想の霧湧いて来し
篠山に紅葉探れば乾く風
時雨止む宮津の虹に傘たたみ
秋風の浦島神社見逃しぬ

山本ミツ子さん

丹後かな土に鋤き込む柿の皮
ひと恋はば秋夕焼の目つぶしに
舞鶴は言祝ぐ地の名即位礼
高御座からりと晴るる野菊かな
菊日和敦賀は鶴賀凧たる
雨あがる伊根の舟屋の柿すだれ
秋晴れになりたる午後の三方五湖
玉手箱見逃し秋の海覗く

高砂市高御座山

月の出を待ちゐる浜の踊かな
山見えてより涼しさの来たりけり
その奥の空も入れたる作り滝
首洗ひ池に緋鯉の尾の涼し
水音に震へてゐたる蛇の衣
遮断機の上がるを待てり夜学生
落蟬のぼたつかせゐる命かな
身の丈の縮みし吾と鬼の子と
月の廊父の足音よぎりけり
亡き夫の三年の夜や星流る

高華抄 門火 佐津のぼる

せせらぎの音のもてなし夏座敷
蝙蝠や水面に遅れ空暮るる
紫蘇もみし妻の手少し夜もにほふ
ひぐらしの鳴き止むあたり暮れはじむ
水洩れを知らずに使ひ墓参桶
庭風に門火のあとの灰のとぶ
流灯の破れて生の火の覗く
逝く夏や浜に干乾ぶ海星の死
海原のはるかがうねり厄日前
沖合を占めて動かず野分雲

けもの道抜けて青田の海原へ

住田千代子

丁寧に生きむとひとり梅を干す

法名 漬香

かんばせの清く枢に香る百合
洗ひ髪つどふは逝きし母の部屋
木天蓼の花に近づきすぎにけり
あとわづか荅を高く立葵
底紅の散りゐてけふの安堵とも
けもの道抜けて青田の海原へ
萍を甲羅に亀の過ぎゆけり

けものみちぬけてあおたのうなばらへ すみだちよこ

今回千代子の作品はすべて優。とくにこの、狭くむっとした獣道をぬけ、目の前が急に開けて、青田に出たら風に波打つ稲が海原のようだと見立てたが、技巧ではなく素直に海と感じた解放感と涼しを感じさせる詩情が心地よい。この句の感情をここでわざわざ説明する必要もなかるう。元来名句とは解説を要しないし、解かりやすい言葉で表現したものばかりである。今月は、亡くなった母への追悼句は故人の名前を句に折りこんだり、木天蓼が猫を狂わせる植物であることの自らへの警告や季節の移ろいを明確にする立葵や萍のユーモアを交えた哀しみなどどれをとっても感銘する。「丁寧に生き」る決意など千代子の変身が見事。

雪卿集 せつけいしゅう

志方 章子

善野 行

白靴を汚してほつとしたりけり
初蟬や話とぎれし時間こゆ
団扇風送られてゐる背中かな
夏帯をほどく大きく息を吐き
手花火の子の横顔の恐ろしき
夏萩の雨に乱るる館かな
車窓より青田の中の墓地を見ぬ
酔つぱらひたる色なるや梅雨茸

手花火を小さな顔と見つめけり
花火持つ小さくて湿る手を包む
還暦の初恋に似て遠花火
涼しさや里へ傾く丘の羊歯
甘樫丘吹きかへす風涼し
たたなづく青垣や梅雨明けにけり
水割の焼酎薄し奈良の夜
放作地原野の貌に原爆忌

升田ヤス子

水打つて腰手拭をさぐりをり
打水やばつたり床几上げられて
揚花火生絹のひかりありにけり
手花火や子の三尺帯の揺れどほし
棚経僧切に豊かに誦したまふ
雁木より風の来てゐるたかむしろ
大文字寄墓は背を寄せ合うて
あはあはと黄色い西瓜いただきぬ

住田千代子

丁寧に生きむとひとり梅を干す
法名清香かんばせの清く柩に香る百合
洗ひ髪つどふは逝きし母の部屋
木天蓼の花に近づきすぎにけり
あとわづか苔を高く立葵
底紅の散りゐてけふの安堵とも
けもの道抜けて青田の海原へ
萍捧を甲羅に亀の過ぎゆけり

永田万年青

藤生不二男

高低の闇に開ける揚げ花火
大花火腹に響きてきたりけり
折鶴を孫に教はり原爆忌
原爆忌球児の死闘つづきけり
川風の生あたたかく原爆忌
右払ひ長く伸びぬる大文字
めらめらと仏ありけり大文字
大文字闇に妖しく炎立つ

新涼の一文字に雲走りけり
てのひらにしなふ重みの新豆腐
自転車のペダル踏みつく残暑かな
裏木戸に手を掛けしまま盆の月
心もちうつむきがちの墓参かな
水切つて泥の照りそむ稲の花
後退りしつ々鳴きをり秋の蟬
かなかなの波立つこゑや死をすこし

出口 誠

谷口 一献

耳鳴りの耳も喜ぶ虫の声
秋の夜のおもちやにされしボールペン
工作に夢中になりて秋の夜
強烈に傘をたたきて秋の雨
えさ啜へうろちよろしたる秋の蟻
コーヒーを飲みたくなりぬ残暑かな
手と足をばたつかせたる残暑かな
久々の顔のほてりよ秋暑し

妖しげな線香花火妻の貌
遠花火潮の香りを運びけり
夜は濃きものと悟りし花火果つ
花火果て月影浮かぶ兵庫の津
酒林碧く色づき今年酒
肩寄せて屋台で交す酒温し
お互ひに視線合はさず人肌爛
秋の虚しさに立ち呑み梯子酒

雪樹集

廣畑 育子

大内 幸子

朝蟬の声もくもくと樹となれり

仰向けの啼かずじまひの油蟬

鬼百合や燈色のローカル線

地を這ひて小米散らして蒔絵萩

橋ひとつ越ゆれば風の涼しかり

端居して好きなリフォームノースリーブ

河骨の影は三時を差しをりぬ

陽の落ちて草の間にまに初ちちろ

掛け合ひにふざけた声の蛙居て

隣へも十八缸ニタ三莢

ガラス戸に守宮の脚よ夜深し

浮草の小溝となりて汲み上げる

平居 濤子

赤松 赤彦

前髪の揺れ手花火の玉落ちぬ

大文字山の深さを思ひけり

寝袋に起す半身遠花火

大文字我に子のあり孫は無し

確かめつ改めつつする盆用意

八月の六日の朝や父母正座

時間差で変る信号敗戦日

スマホなど弄つてゐたる原爆忌

想ひ出に余白のありし夏休み

ベッドから転げてゐたる原爆忌

八月尽平和の言葉あふれしめ

大空に雲ふたつあり原爆忌

江見 巖

田尻 勝子

青栗や蹴飛ばしさうな部屋の隅
餌に寄る水音の重き斑鯉
迎火や照らし出されぬ下半身
にはたづみ百日紅の落花あり
星月夜倉に入りし神輿かな
草刈の露はになるや獣道
送り火の次々ともる空中に
船形を嵐山から見し事も
お花畑郵便局の切手かな
竹林のモンスター吼ゆ野分けかな
一匹の金魚掬へぬ村祭
鈴虫の青き炎と鳴き揚げぬ

延川五十昭

延川 笙子

北国へ道分れゆく秋の雲

福井には鈍色の海原爆忌

茶屋町や雨にぬれゐる合歡の花

原爆忌ルンバ流れるカフェにゐて

越前の小雨に合歡の残り花

思ふより敦賀は都会原爆忌

越中や風を呼びこむ風の盆

石棺に夕日の陰や原爆忌

水音に声の届かず秋の川

熊蜂の引き寄せられて返り藤

殿様の借入文書走り蕎麦

届かざる想ひのたけを滝の水

六花集

磯野青之里

木苺の横へ伸びゆくラテイス垣

指先で妻拵り出し夏茗荷

耳元に問答無用蝉しぐれ

悪戯を残して去りし盆休み

御詠歌の風に途切るや地藏盆

冷泉 花

炎屋や木蔭の鴉口を開け

干梅の匂ひ夜まで残りたる

舌嚙んで血の味残る終戦日

一房の葡萄や妻の誕生日

新涼やご飯にのせる梅ひとつ

石川 憲二

赤色の気持膨らむ原爆忌

城は白なり骨も白なり原爆忌

魯山人濡れ額の雄々しき原爆忌

ユーカーリの葉は生々と原爆忌

石垣にきちんと積まれ原爆忌

中御門 出

菊谷 潔

閑かさや処々にひぐらし夜明け前

しばみゆく垣のむくげを一つ取り

閑かさや蝉のたぢろぐ昼下り

それぞれの空をあふぐや蝉しぐれ

草払ひ雲ひきちぎり野分過ぐ

ばあちゃんが芋掘つてゐる原爆忌

午後三時古文書調べ原爆忌

原爆忌若狭行きかふ親子連れ

雨上がり髪の毛染める原爆忌

静かなるクラシック聴きし原爆忌

螢雪譚 山田六甲



手花火を小さな顔と見つめけり

善野 行

小さな顔は幼い顔とも小顔の人ともとれる。が、この句は手花火だから、おそらく子どもと楽しんでる光景だろう。その様子は子どもの心に刻み込まれ、大人になっても思い出として強く印象に残るのである。

丁寧に生きむとひとり梅を干す

住田千代子

「丁寧に生きる」というのはいかにも千代子らしく深い悟りだ。ご主人を亡くして心落ちしたが、娘や孫、学校では児童のために自らの家庭のために懸命に生きる。こういう生き方を尊敬する。まことに命を測りながら人は丁寧に生きるべきである。無節制な生き方をして不眠症になったり極端な便秘になったり、不眠症だと悩む男も居る。今の姿をみようとするれば過去のの原因を知るべし。ここまで書いたら少し休めとワープロ一太郎が言う。

高低の闇に開ける揚げ花火

永田万年青

見事な写生句。だが、報告だけの写生では詩にならない時もある。写生だけで句もなるのは、そこに詩が潜んでいるかどうかである。ただし主観写生なら私はよいと思う。もつともこの句は闇に高低があると言っているのだ、それは気づきであり発見である。気付きを起こすためには、観察、問いかけ、視点を変えるなどが必要である。しかし万年青は「俳句三昧」の域まで努力到達する人だから必ずや秀句に巡り合うことを保証する。